鷗外全集

第六卷

第六回配本（全三十八巻）

鷗外全集　第六巻

定價貳千圓

昭和四十七年四月二十二日　發行　©

著者　森　林太郎

發行者　岩波雄二郎

發行所　東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社　岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

負けたる人　ショルツ　一
午後十一時　キイド　三九
獨身　六三
杯　八一
白　リルケ　九一
釣　アルテンベルヒ　一〇一
牛鍋　一〇七
電車の窓　一一三
犬　アンドレイエフ　一二三
人の一生　アンドレイエフ　一三五

木精　二四一
里芋の芽と不動の目　二四九
鴉　シュミツトボン　二五九
青年　二七三
歯痛　アンドレイエフ　四七三
生田川　四八三
新脚本『生田川』について　四九九
歌舞伎第百十七號『新脚本生田川』について　五〇〇
棧橋　五〇一
聖ジユリアン　フロオベル　五〇九
罪人　アルチバシエツフ　五五三
後記　五六九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

負けたる人

WILHELM VON SCHOLZ.

自序

彼誰時である。戸の外の日がもう褪めて白けて來る。家々が凍つた霧のやうにきらめいてゐる。霜を送る風が地を這つて來る。この灰色の彼誰時に、己のランプがこんもりと、溫に燃えてゐる。己は「日の樂」を己の臂で抱いてゐて、己の目を彼の蒼ざめた口の上に息ませてゐる。影の木々が忽ち音もなく闇のうちに這入つてしまふ。おう美しい。己のランプの初の光。お前は己の部屋から彼誰時のきらめきの中へ差してゐるね。

己は醉つた花の育つやうに、白髮になつた日の中から、光を一ぱい受けて育つた。己は靜に船の艣を動かして、海原が軟かい赤みを見せて照つてゐる時、「夕」の岩に漕付けた。そして今、北の國の神話にある英雄のやうに偉大に立つてゐて、陸も水も休んでゐる時、濃藍色の眠の廣い國を守つて、そして人間といふものゝする、あらゆる浮世の爲草を飛び越して、はにかんでゐる星の花を摘みに行く。

己は日の中から太陽を一つ持つて來た。それが今惠のある靜な明りを放つて、沈み行く闇の深い荊を、人の丈ほど照してゐる。そこで己はその荊の中の刺や果や美しい花を一度に見渡す。己の光は生れる詩から差してゐるのである。

なぜと云ふのに、あらゆる日といふ日は、沈み行く夕に仕へるのである。昇り行く夕に仕へるのである。夕といふものは深い影を落す翼で羽ばたきして、世に苦勞をさせるものを取つてしまふのである。夕といふものは、星の群の家を立てて、泉の水を湧き立たせるのである。この夕といふものに日が昇つて行くのは、丁度呟く大理石の薄明りへ、かがやく階段を踏せて、白い裾を曳いた僧を連れて行つて、琴を彈かせるやうなものである。

人物

物語。

丈高き、威嚴ある女性の人物。美しく、嚴かなる、活氣ある顏。されど白髮なり。口上を陳ぶる口跡は、案内者の詞の如く靜なるべし。

夫人。

美しき、豐なる女。白き袖の付ける、明るき綠を帶びたる紫の衣。闇き赤色の髮。年三十五六歳。ジエルマンの昔語のブルンヒルドの如き姿。初は口跡刻薄に聞ゆ。さて後になりて驕の色失すると共に、その刻薄なる處全く無くなる。

伯爵。

上の夫人の夫。色蒼き、中高なるよりは寧ろ幅廣き顏。作者はこの顏をチチアノの繪にあるシャルル

五世に似たるやうに想像す。澤なき暗色の頰髯。衣裳は外の騎士と異なることなく、褐色の天鵞絨のワムスにて天鵞絨のバレツトを戴けり。

ヲルフ。

上の夫人の情人。大男。動作世馴れず、卑し。八字髭。初は鞣革のワムスを着てその上に黄金のメダイヨンを吊りたる鎖を懸く。後には暗碧色の衣に薄鼠色のバレツトを戴く。

負けたる人。

中背にして痩せたる人物。年齢見分け難し。横顔の輪廓鋭く、目は窪みゐる。初は鞣革のワムスの上に刺繍の紋附きたる掛衣を掛く。頭に明色の絲毛の鬘を戴きたるが、瞳の黑きと異樣に反映す。革帶。後に僧形になりたる時は、鬘を戴かず、短く黑き髮を呈はし、褐色の僧衣を纏ひ、明るき褐色の紐を腹に結ぶ。紐に珠數を垂る。手には一束半の長さなる黑檀の十字架に、極はめてささやかなる牙彫の基督像を附けたるを持つ。又再び呼返されたるときには、最早この十字架を見することなし。髯無し。

ゴテリンデ。

明色の髮。優しく、扣へ目なる娘。立居振舞にて、戀をなしをる娘と知らるるやうに勤むべし。

第一の舍人。

明色。時代裝束。女優に勤めしむ。

第二の舍人。
　褐色なる髮と瞳。時代裝束。第一の舍人より丈高し。青年俳優に勤めしむ。
第三の舍人。
第四の舍人。
第一の騎士。
　以下騎士はみな色の濃淡を異にせる時代裝束を着く。
第二の騎士。
第三の騎士。
第四の騎士。
女中數人。
　時刻
秋の日の夕暮。
　場處
獨逸國某所の城。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

口上

物語。（幕の外に立ち出づ。）今から凡そ一時間、重くろしい薄明りの夢に御覽になる事を、皆解かうとする詞などを、尋ねようとはなさいますな。一日の日が匂になり、泡になつて消え行く時、あなた方が空間のうちに一人におなりなさるまで、あなた方の魂を、微かな風の吹くやうに、そと撫でて行く縛があります。その時お感じなさる事を言ひ現はすべき詞はない。そのお感じは雲から生れて、雲のやうに消えて行きます。併しその時お身のうちには、種々の形が現れて、はつきり物を申します。その言ふことは組打の、節奏のある道行らしく、あなた方に聞えませう。夜が沈んで來ます。許多の靈に接吻せられて、あなた方の身の内に、丁度頭の上の通りに、星の群が出て來ます。かがやく感じが出て來ます。思ひ切つてその時に深くお見入りなさいまして、御自分を御自分でお知りなさる事の限は、まあ、どんなものでせう。それを思つて御覽なさい。初は只の一言に奥深く潜んでゐる、ぞつと身に染む吁です。それが忽ち縛の繩を解いてかがやき出して、強くなり、大きくなり、とう〳〵波の打つやうに轟き渡つて參ります。空に照る日の明るみに、高く響くオルゲルの頌歌のやうに。かういふ風に人生の解きほぐされない秘密の調子が、育ち上がつて詩になります。（このうち緞帳徐に卷上げらる。）暴風になります。生と死とがそれを越して、手を取り合つて契を結びまする時。

（開きたる舞臺を踏みて徐に退場。）

舞臺大いなる座敷を現す。ロオマン式の建築。調度はロオマン式よりゴチツク式の初期に至る過渡時代。背景に一本柱の

窓二つ。窓は甚だ厚き壁のうちなる石の高まりたる腰懸二つ宛を現す。腰懸と腰懸との間に高き階段あり。此の四つの腰懸に刺繍ある氈を覆へり。窓二つの間に黑き木の櫃ありて腰を懸くるやうになしあり。左の側壁に傍ひて窓に近く、人長の石のカミン爐あり。爐の前にどつしりしたる、暗褐色の卓あり。卓の周圍にはやはりどつしりしたる椅子の類數個を不規則に置きあり。爐の傍左手に垂布あり。その後には石の階段二段ありて、その奥に看客に見ゆる、重げなる、鐵の金物を打ちたる扉あり。爐に向ひて、右側に約四呎の高さなる簞笥あり。簞笥の最下の抽斗は半分引出しあり。その側右手に高き戸口ありて、すらりと丈高き二枚の扉を取付けあり。その側に舞臺の前の緣まで達する玉座あり。玉座は紫の天蓋にて覆ひ、これに昇り行く爲めに三段を据ゑたり。壁にも天蓋の柱にも紋の付きたる楯と繡取の紋の布とを下げあり。武器を立つる臺に刀、槍その他折れたる槍の柄などを立てあり。左手の窓より夕日差し込みゐる。右手の窓は暗し。影は次第に、白に云ふ如く、左の窓をも襲ひ來る。後には彼誰時となる。左の窓の前なる卓の傍に女中ゴテリンデ立ちて、日の光を浴びつゝ外を見出しゐる。右の窓の右の腰懸に夫人座しゐる。

ゴテリンデ。夕日が丁度只今あの古い建物の鼠色の壁から塔の方へ這つて參る處でございます。今にぱつと赤くなりませう。（笑ふ。）赤くなりましたら、奥様、あなたのお手と白のお袖とを明るい處の眞中でお振り遊ばして、招いて御覽なさいまし。そして氣を付けてごらうじて入らつしやいまし。さう致すと螢が飛出します。入らつしやいまし。お厭でございますか。（夫人默す。）あの古い塔の石垣は强情な石垣でございますね。眞白な冬になりますと、あちらの方の（指ざす）霧の中へ日は這入つてしまひますが、日は霧に呑まれてしまひますが、只今は赤い毫光が山の向うへ沈んで行くのが見えません。（右の方へ歩み寄る。）それでもも

うあの瓦まではとどきません。もう窓板一ぱいには差しません。（笑ひつゝ開きある窓板を足にて閉ぢ、振返る。）もう日が逃げてしまひました。（頷く。徐に。）夏の踊場であつた草原の早く濕つて來る上を、「夕」が次第に長く包むやうになつて參りますね。そして誰の胸にも物思がぢいつと沁み渡るのでございます。木々の葉のそよぎます中を、胸一ぱいの夢見心が、さつさと跡戻りをして、咀はれて亡びてしまつた夏の幸福の中に這入つてしまふのでございます。

夫人。山毛欅の赤い茂みが、爲合の場處を遮つてゐる。わたしの目に見えるのは、あの廣い草原のはづれの處に立つてゐる旅の騎士の家來ばかりだ。（ゴテリンデも夫人と共に右の窓より外を見る。）あそこの木の枝の向うに打物らしいきらめきが見えてゐるやうではないか。

ゴテリンデ。はい。只今は見えまする。もう又見えなくなりました。（間。）みんなが申しますには、あの旅の騎士は大相好い方で、歌をうたふと申すではございませんか。

夫人。（最早外を見ず。）旅の騎士の事なんぞを、なんでわたしが知るものかね。なんとなく、昔一度見た事があるやうではあるが。（間。）どうも昔尼寺の格子の側で見たやうな。春の花の甘い味を覺えた頃であつただらう。わたしはまだほんの子供で、尼達に花を持つて行つてやつた時の事だつた。もう長い間その時の事は思ひ出した事もない。（物思ひに沈む樣子。）さう、さう。暑い頃の眞晝の日がくわつと照つて薔薇の花に媚びてゐる時だつた。或若い尼が一人あの騎士の目をぢつと見てゐた。その尼は恐ろしい罪を犯して、程なく死んでしまつた。（鮮に笑ふ。）ほんにわたしは詰まらない夢を見てゐるのだ。なんでもない事が種になつ

て色々な事を思ひ出すものだ。其時の騎士があの騎士ではないかも知れぬ。わたしはまだ其頃はほんの子供であつたから。そして騎士はもう餘り若くはなかつたから。

ゴテリンデ。（ちょいと外を見る。）こちらの騎士様が爲合に勝つて、あの騎士を虜に致して歸つて參るでございませうか。

夫人。（微笑。）さうなるかも知れないよ。ヲルフは強いからね。（目輝く。）

ゴテリンデ。さうなりますかも知れません。さうなりますと、あの旅の騎士はあなたの御家來になりませう。わたくしの考では、旅の騎士に罰があたつて、（聲を細くし早口に。）負ければ好いと存じます。人の聞いてゐる前であなたの事をあんなに惡く申したのでございますから。誰にも靡く女だの、誰にも心の迷ふ人だのと。

夫人。（無造作に。）お聞き。地響がするよ。（二人とも外を見る。）

ゴテリンデ。あの家來の小さく見えます事ね。

夫人。御覽。あの槍の折の飛んで行くのを。

ゴテリンデ。はい、はい。好く見えます。（間。）それでも、どこへ飛んで參つたか、もう見えなくなりました。家來は木立の中へ這入つてしまひました。もう歸るのでございませう。

夫人。（首を振る。）まだ勝負が付いたとは、わたしには思はれないよ。あれ、あれ。家來がまた出て來たよ。槍は持つてゐないね。（無造作に窓に背を向く。）見てゐるのが面倒だね。こゝへ來て腰をお掛け。そして昨日

お前の氣にしてゐた事を、今わたしに言つてお聞かせ。

ゴテリンデ。（たゆたひつゝ）奥様。氣味が惡うございます。

夫人。馬鹿な子だね。

ゴテリンデ。あの鷹匠のワイトブレヒトが申しますには。

夫人。ふん。

ゴテリンデ。その話を致すと魔がさすと申すのでございます。

夫人。（笑ふ。）そのくせ鷹匠は話したのかい。

ゴテリンデ。（物體ぶりて。）ええ。話すには話しましたが、せつなげに、やつとの事で話したのでございます。鷹匠が申しますには、話すとやつて來ると申すのでございます。それでわたくし共に、決して話してはならないと口留を致しましたのでございます。（夫人默す。）或騎士の話でございます。（夫人默す。）その騎士は坊さんで、そして歌うたひださうでございます。顏の色が死人のやうに蒼白くて、どの女をでも迷はせて身拔けの出來ないやうに致すといふのでございます。その騎士に愛せられますと、どの女でもうつとりとなつてしまひまして、とうとう騎士の凄い目で見詰めてゐられるうちに、死んでしまふのださうでございます。（夫人微笑む。）女の死にますのは、たつた一晩で死ぬる事もございます。たつた一時間で死ぬる事もございます。女はただ面白く嬉しくつて笑つてゐるうちに死ぬるのだと申します。女は笑つてゐますうちに騎士はふいと立ち上がつて、歌をうたひ出します。それが女の命を取る歌なのでございます。歌の聲が一

音毎に刄物のやうで、そのからからといふ響が、廣間に鳴り渡ると申します。（間。）それかと思ふと、どんな女をも迷はすやうな、優しい歌をうたふのださうでございます。（この詞はさも深く信じたるらしき様子にて云ふ。夫人笑ふ。）世間では餘程久しい間、あの騎士はもう死んだのだと思つてゐたと申します。一體年が幾つになるか、誰も知つたものがございません。凝り固まつたやうな、冷たい顔附は、誰が見ても若いのか年を取つてゐるのか知れないのださうでございます。

夫人。（笑ふ。）それをお前はほんたうだと思ふのかい。

ゴテリンデ。奥様。ほんたうなのでございます。不思議な事には、その騎士は、何處へ參りましても、旅に窶れたといふ風で、埃だらけになつて、着きますのを、その土地の人が見て、きつと何處かで見た事があるとか、逢つた事があるとか思ふのだと申します。（間。烈しく怠なる語調にて。）恐ろしいではございませんか。このお話を致しますと、直に何處からか其處へ出て參るといふのでございます。（氣味を悪がる様子。）このお話を致しましたから、もう一晩や二晩はわたくしはとても寐られません。

夫人。（面白げに。）今に分かるよ。鷹匠の云つた事が、どの位馬鹿げた事だか、今に分かるよ。そんな騎士なんぞは來やしないからね。

（梯子を踏む足音聞ゆ。中庭の方には人聲、馬の嘶く聲などす。）

ゴテリンデ。（窓に駈け行く。）歸つて參りました。具足を片付けに持つて行くと見えます。

（戸開く。ヲルフ入り來る。負けたる人を片手にて捕へゐる。負けたる人は目を床に落して戸口に立ち留まる。ヲルフは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com